

Takashi Kurosaki, Comparative economic development in India, Pakistan, and Bangladesh -- agriculture in the 20th century (書評)

著者	藤田 幸一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	59
号	1
ページ	77-80
発行年	2018-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00050231

Takashi Kurosaki,

*Comparative Economic
Development in India,
Pakistan, and
Bangladesh: Agriculture
in the 20th Century.*

Tokyo: Maruzen Publishing, 2017, xiv+235pp.

ふじ た こう いち
藤 田 幸 一

はじめに

本書は、インド、パキスタン、バングラデシュの1901/02～2001/02年の長期にわたる農業統計を県(district)レベルで整備し、そのデータセットに基づき、主として「市場」の発達に伴う農業生産の商業化プロセスを、とくに生産の多様化や比較優位に基づく特化の空間構造に着目して分析したものである。出発点は、1995年から開始された一橋大学経済研究所の「アジア長期経済統計プロジェクト」(代表: 尾高煌之助・一橋大学名誉教授)にあった。著者の最大の貢献は、1947年の印パ分離独立に伴う英領植民地期と独立後の統計の不連続、および71年のバングラデシュ独立に伴う東パキスタン時代と独立後の同様の問題、とりわけ県境の度重なる変更に伴う困難や藩王国のデータ欠如などの問題を克服しつつ、通時的に整合性のあるデータセットを県レベルで整備したこと、すなわち、もって学界の貴重な「公共財」を創出した点にある。その難渋なプロセスは本書のPart Iの付録に詳述されている通りであるが、ロンドンのIndia Office Libraryに所蔵されている原統計を収集し、またSivasubramonian [1960; 2000]を中心とする既往研究との照合を丹念に行いつつ、成し遂げられたものである。以下、ごく簡単に本書の内容を要約しておきたい。

I

本書は、第1章導入部の後、第8章結論に至るまで、第2章から第7章の全6章に付録を加えたものを第I部から第III部に分け、構成されている。

第1章導入部では、経済発展過程における農業部門の役割についてレビューした後、とくにTimmer [1997]を援用し、不完全な市場環境から市場が次第に発達していく経済発展過程の中での農業(とくに食料作物)の多様化・商業化の問題を取り上げ、本書全体の問題関心を披露している。

第I部第2章では、現在のインド、パキスタン、バングラデシュの国家領域の20世紀100年間の農業付加価値生産額、およびその労働生産性と土地生産性の動きを分析し、植民地期の停滞から分離独立後の成長への転換が1950年頃にあったことを明らかにする。また土地生産性の上昇要因を要因分解し、土地の外延的拡大、土地の年間利用回数、個別作物の単位面積当たり収量のほかに、より付加価値の高い作物への作付け転換というこれまで明示的に取り上げられてこなかった要因の重要性を指摘する。

第3章では、別途推計したGDPおよび非農業部門の付加価値生産額のデータを合わせ、農業とマクロ経済との連関、とりわけ農業の前方連関効果(農産物加工など)の長期的分析を行う。第I部付録は上記の通り、データの推計方法についてである。

続いて第II部第4章では、県レベルのデータに基づき、西パンジャブ(現在のパキスタン・パンジャブ州にほぼ相当)に限定し、第2章と同様の農業付加価値生産額や土地生産性の要因分解分析などを行い、市場の発達に伴う農業生産の商業化プロセスについて、とくに比較優位に基づく生産特化の空間構造の様態を明らかにする。

第5章は、第4章と同様の県レベルのデータに基づいた分析作業を、1960年代半ば以降のインドに限定して行ったものである。

第III部では、国レベル、県レベルに加え、個別農業経営レベルのデータも援用し、より詳細な分析を行っている。第6章は西パンジャブの事例で、テーマはやはり市場の発達に伴う農業の作目選択のあり方、とくに生産特化の空間構造である。これに対して、第7章は、舞台をパキスタンの北西辺境州

(2010 年以降は Khyber Pakhtunkhwa に改称)に移し、地域特有の家畜部門との混合農業(南アジア全域に共通)の中で、災害(自然および人為)時のリスク対応、とくに資産(土地、家畜、その他の人的資本も含む)の処分についての経済行動を分析する。これも、広義の市場(とくに信用市場)の発達の中での経済行動の変容という意味で、本書全体の課題の一環として位置付けられている。

第 8 章結論では、本書のおもな結論、残された課題、そして政策的含意について述べ、締めくくられている。

II

以下、書評としての本題に入りたい。細かい点から大きな点まで、いくつかコメントを述べる。

まずはやや細かい点から。第 1 に、農業生産の特化(specialization)というひとつのおもなキー概念についてである。市場の発達に対応して、ある地域(究極的には個別農業経営)が比較優位のある作目に特化していくという動きは、南アジア主要 3 カ国のすべてにおいて、とくに時代が現在に近づくほど明瞭に観察された。土地生産性の上昇要因の要因分解で、作目構成(crop mix)の問題を初めて数量的に扱うことに成功し、かつ南アジアの農業土地生産性の上昇過程において作目転換が一定(インド、パキスタンで約 3 分の 1)の重要な役割を果たした点を明らかにしたことは、本書のひとつの大きな貢献であろう。

ただし、ある作目への特化をどう扱うかについては、季節性のある農業の場合、やや問題をはらむ。すなわち、1 年 1 作なら問題はないが、cropping system 全体としての比較優位を考えなければならぬからである。たとえば、付加価値が高く儲かる作物への作付け転換が、それと組み合わせられる付加価値の低い作物とセットで導入されるケースである。その場合、特化をどういう指標で捉えるのがよいかについては、やや問題が残るのではないだろうか(ただし、複雑すぎて評者は代替的な指標を思いつかない。本書が採用した指標でも、原理的にはともかく、実際上の大きな問題はないといえるかも知れない)。

第 2 に、本書で市場の発達という場合、主として

農産物市場が念頭に置かれていることは明らかである。そしてその発達を促進するものは、道路網の整備、公設市場を含む市場(いちば)の整備・発達、通信技術の普及、基盤にある電化などであろう。また、市場の成熟に対応して農業生産の商業化を促進するひとつの重要な条件として、とくに南アジアの場合、水利の整備もあろう。あるいは評者の思い違いかも知れないが、本書は、そういう外生的な条件整備に地域(究極的には個別農業経営)が受動的に対応する、という図式が想定されているように感じられる。基本はそうであろう。しかし、地域(農業経営)の主体的な対応という側面も重要なはずである(著者も、第 8 章 p.221 で、南アジアにおけるトラクターや灌漑に対する民間投資の重要性を指摘している)。

とくに評者が重要と考えるのは、井戸(open well)や管井戸(tubewell)に据え付けられたポンプセット(電動ないしディーゼル)である。Shah [2009] が強調するように、1975 年頃を境に、南アジア灌漑部門のおもな担い手は、政府公共部門から個別経営部門に決定的に移行した。ポンプセットは「緑の革命」に寄与しただけでなく、タイムリーな灌漑を可能にするを通じて、市場対応にも決定的役割を演じるに至っている。その意味で、灌漑率をひとつの指標にするのではなく、データが入手可能であれば、少なくとも井戸灌漑とその他灌漑に分けて分析を行うべきではなかろうか(p.137 など)。井戸は、とくにインド亜大陸北西部域では、植民地時代から重要であったので、単に 1975 年以降だけの問題ではないことも指摘しておきたい。

第 3 に、20 世紀の 100 年間を通してみた場合、1950 年頃に南アジアの農業発展の転換点があったという指摘、とくにそれが 1960 年代後半に始まる「緑の革命」よりも 15 年以上も前であったという指摘は、非常に重要である。このことが、きちんとしたデータで改めて明らかになった点は、本書のひとつの大きな貢献であろう。

ただし、一步進んで、なぜ 1950 年頃、すなわち端的にいつて分離独立の混乱が収まった直後であったのか、という南アジア研究者なら誰しもが強い関心を抱く点についての本書の見解(p.29)は、かなり曖昧である。分離独立後の食料増産キャンペーン、農業技術普及や農村開発の国家計画、制度改革(ザ

ミンダーリー制廃止など)、世界大恐慌による1930～40年代の価格停滞からの回復に伴う農産物交易の改善、バングラデシュを除く地域での灌漑の拡大、といった可能性のある要因を列挙するにとどまっているからである。県レベルのデータ整備を前提にした、もっと突っ込んだ議論が期待されているのではなかろうか。

また、この点に関連して、やや細かい点を指摘するならば、「図2-4は、1960年代末までのコメと小麦のエーカー当たり収量は非常に緩慢にしか増加しなかったことを示している」(p.30)とあるが、小麦についてはその通りといえても、コメについてはどうであろうか。コメは、インドでもバングラデシュでも1950年頃からかなり顕著な増産に転じ、その趨勢が70年代末まで続いた後、本格的に増産したのは80年代である。コメの「緑の革命」は小麦よりもかなり遅れたのであるが、同時に、やや緩慢ながら、小麦よりも早く1950年代には増産が始まっていたのである。

第4に、「差の差」の検定に関連する、国境ができた前後の農業生産パフォーマンスの差についてである。インドと(東パキスタンを含む)パキスタンの分離、パキスタンからバングラデシュの独立の2回にわたって、突然国境が引かれたことが、他の条件が一定の下で、農業にどう影響したかを「社会実験」することとなり、それを「差の差」の検定で明らかにするという点は、本書の魅力ある論点のひとつである。結果は、1947年分離独立の政治的悪影響はバングラデシュで最も弱かったこと、71年のバングラデシュ独立の悪影響もバングラデシュで弱かったこと、の2点であった。著者は言及を避けているが、それはどう解釈されるのであろうか。ジュート原料の主要生産地であったバングラデシュにその加工工場が1つもなかったことに代表される分離独立前のバングラデシュの純農村性、バングラデシュ独立後の国際社会からの援助の大量流入などの要因がすぐ評者の頭に浮かぶが、著者はどう解釈するのであろうか。

第5に、第7章パキスタン・ペシャワール県における1920年代半ば以降の農業生産の伸びは、やや細かい点ながら注目される現象である。著者は、可能性のあるその要因として、1908年からの政府農業試験研究の開始に伴う技術革新を挙げている

(p.195)。それは具体的に何であったのだろうか。バングラデシュでは、ほぼ同時期の1912年にダッカで稲作試験研究が開始されるが、その成果は50年代半ば以降、アウス稲の作付け拡大(アマン稲との2期作化の進展)という形で本格的にあらわれた。カギとなる技術は、アウス稲における極早生種の選抜・育種、アマン稲への弱感光性品種の海外からの導入であった〔藤田1986〕。1926年に始まる農林省指定試験制度の下での日本の近代的な農業試験研究の成果が、戦後になって稲作の大増産という形で顕在化した事実もそうであるが〔速水1986〕、一般に農業試験研究の懐妊期間は長い。北西辺境州の事例は、もう少し丁寧に探究する価値があるのではなかろうか。

第6に、第7章のとくに後半以降の記述はやや専門的すぎて、わかりにくさが否めない。とくにCarter and Barrett [2006]の論点の解説が省略されすぎていて、asset poverty trap hypothesisが、それと対比するbuffer stock hypothesisとの関連で何がどう違い、それが本書全体の論旨にとってどういう意味をもつのか、専門外の読者にはわかには理解できないのではないか。元論文のKurosaki [2013]にしか掲載されていない付表を参照しなければならないというのも難点であろう。

III

最後に、全体的印象について若干述べておきたい。本書は、どういう読者を対象に著者が何を伝えたくて書かれたものなのか、今ひとつ判然としないところがある。端的には、開発ミクロ経済学なのか、南アジア経済(史)なのか。また、第7章を除く本書の全体テーマであるTimmer [1997]の枠組みが少々単純すぎて、20世紀の100年間を対象にした初めての学術書のわりには、南アジア経済(史)を専門とする読者にとって、やや物足りなさが否めないように思われる。農業の商業化や生産特化の話は常識を大きく超えるものではないし、第8章の最後に提示された政策的含意も、かなり常識的なものである。

しかし、以上の点は、本書の価値を揺るがすものではまったくない。最初に指摘した通り、本書(およびそれに関連する論文など著者の業績を含む)の

最大の貢献は、南アジアの主要3カ国の20世紀100年間の超長期にわたる農業生産統計の整備という形で、学界の公共財の創出にあったと考えられる。本書では、その貴重なデータセットを利用した著者の第1次的分析がなされたわけであるが、今後、著者にはもちろんであるが、それ以外の学界全体として、この貴重な公共財の利活用を通じた南アジア経済（史）における新たな知見の蓄積に期待したい。同時に、可能であれば農業部門以外の歴史的推計データの改善が行われ、それを基盤とした分析の深化も期待されるであろう。

文献リスト

〈日本語文献〉

- 速水佑次郎 1986.『農業経済論』岩波書店.
藤田幸一 1986.「バングラデシュにおける農業発展——農業構造と技術変化の関連を中心に——」『アジア経済』27(12) 2-23.

〈英語文献〉

- Carter, Michael R. and Christopher B. Barrett 2006.
“The Economics of Poverty Traps and Persistent Poverty: An Asset-based Approach.” *The Journal*

of Development Studies 42(2):178-199.

- Kurosaki, Takashi 2013. “Dynamics of Household Assets and Income Shocks in the Long-run Process of Economic Development: The Case of Rural Pakistan.” *Asian Development Review* 30 (2):76-109.

- Shah, Tushaar 2009. *Taming the Anarchy: Groundwater Governance in South Asia*. Washington, DC: Resources for the Future.

- Sivasubramanian, S. 1960. “Estimates of Gross Value of Output of Agriculture for Undivided India 1900-01 to 1946-47.” in *Papers on National Income and Allied Topics, Volume I*. ed. V. K. R. V. Rao, S. R. Sen, M. V. Divatia and Uma Datta. New York: Asia Publishing House.

- 2000. *The National Income of India in the Twentieth Century*. New Delhi: Oxford University Press.

- Timmer, C. P. 1997. “Farmers and Markets: The Political Economy of New Paradigms.” *American Journal of Agricultural Economics* 79(2): 621-627.

(京都大学東南アジア地域研究研究所教授)